

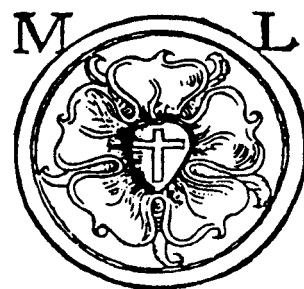
“Luther und die Avantgarde” (WIENAND, 2017), S.314

アジアの声、 現代の眼

ルター 新聞

Die Luther Zeitung

ルーテル学院大学（日本ルーテル神学校）ルター研究所二ニュース・Nr. 81



今号の内容

- 2面 現代におけるルター研究
- 3面 書評『アジアの視点で読むルターの小教理問答』
- 4面 鈴木浩先生のルター研究
- 5面 再録「説教する人ルター」鈴木先生の思い出
- 6面 シリーズ「人間ルター」⑨「怒りの人ルター」ルターのことば
- 7面 私の博士論文ルターと会衆讃美
- 8面 ルター・セミナー報告研究所二ニュース

アジア各国のルター研究者が共同執筆した『アジアの視点で読むルターの小教理問答』が出版された。改めて、ルターを学ぶことの意味を考えさせられる書物である。どういう意味があるのか。一言で言えば、ルターを学ぶに際して、現代の目・アジアの声が必須だ、ということである。今号はこのテーマについて考える。

六月一日、ルター研究所第二代所長の鈴木浩先生が天に召された。一月の徳善義和先生に続いて、私たちは大切な二人を天に送ったことになる。

先生方のお仕事を振り返れば、改めてルター研究所の二つの課題がみえてくると宮本所員は言う（二面）。一つは、歴史的にルターを学ぶ（ルターの原典の翻訳を含む）ということ。もう一つは、今日的にルターから学ぶということである。歴史的に、そして今日的に。今日的とは、それが「現代の目、アジアの声」ということになるのだろう。（え）

現代におけるルター研究―歴史的に、今日的に

宮本 新

どんな人の歩みにも節目があるように、神学研究にもまたそれに似たようなことが見られる。ルター研究所はもうすぐ開設四〇周年をむかえようとしている。そこに精力的に研究に打ち込んだ先達の足跡がみられる。とりわけ初代所長である徳善義和先生、そして二代目所長である鈴木浩先生のつづけての訃報に接した本年、あらためて研究所もまた大きな節目を迎えていることは間違いない。これまでの歩みを振り返り、そしてこの先、何を継承し、また何を未来に託して展開するのか。これらの問いを考える節目にある。

研究所が一九八五年に開設されて以来、精力的に取り組んできたことは、ルターの原典研究であり、その著作を日本語で読めるようにすることであった。そのためには、ルターその人と宗教改革という時代の文脈（コンテキスト）を理解することもまた必要であった。これに熱心に参画したのは所員だけではない。ルターセミナーや公開講座、そして講演会や講壇奉仕など折々の機会に、牧師も信徒も熱心に学び、議論し、交流を深めてきた。

あらためてルター著作集を手に取り眺めると率直に思うことがある。今これを成し遂げることはできない。人手や資金といった数字上の話からだけではない。きつと、多くの困難があり、それを乗り越えてきた翻訳事業であつたに違いない。その場になかった次世代の者として驚くのは、これまでの研究所とそこにかかわった人たちの集中力である。それ自体が、日本語におけるルター研究の受容と、その到達点を示しているように思われる。もちろん著作集だけではない。個別の翻訳本、関連書籍やコツコツと継続されてきた紀要論文の積み上げもまた同様である。その核心には「ルターの著作を読み、ルターそのものに学ぼう」とする姿勢があり熱意がある。この原典研究と歴史神学の学びはこれからも継続されるべきであり、これらの著作はむしろ未来の人たちにこそ開かれている。しかしながら、このような研究の足跡から、もう一つ別の展開が芽生えてもいる。それが現代という文脈におけるルターである。

文脈におけるルターを、より教会的にいいかえると、今日の宣教におけるルターである。したがって、これは今にはじまったことでもなければ、国内にかぎられた話でもない。いつでもどこでも潜在的にあるテーマだ。たとえば、ルーテ

ル世界連盟ではすでに一九五〇年代、義認をめぐる論争が起こっていた。神を前にしたあのルターの深い罪理解と畏怖する良心、そして罪の赦しの福音は、現代の宣教においてどうなのか。それは一六世紀ドイツの修道士の魂の葛藤体験であり、そしてそれは私たちのものになるだろう。か。こうした論争は数年に及ぶことになった。そこで論じられた核心的課題は、その後二〇〇〇年代にいたるまで継続している。誌上の論争ではない。世界各地の教会とそこで生きる信仰者の内面の葛藤と相克であり、神学はこれを表現しているにすぎない。そのような論争と取り組みこそが「文脈にあるルター」である。

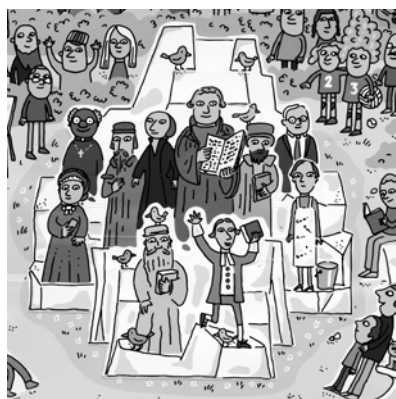
アジアの文脈に目をむけると、さらに複雑な神学的課題が認められる。かつて欧米を中心に論じられたキリスト教と世俗化の議論に対し、アジアの神学者たちはそれ自体が相対的なテーマにすぎないことを指摘した。アジアの脈絡においては、近代の「神なき世界」の神学ではなくて、むしろ「神々の世界」における神学こそが自分たちの課題であることを表明したのである。その神々とは、単純に宗教が多数存在する事実だけを指しているわけではない。たとえば神なき世俗世界でも、そこには経済至上主義のモンの神を拝する事態もあれば、権力やこの世を神とすること、あるいは自らを神の位置におく隠れた神学的実存も存在するからだ。このアジアの文脈において、その

人その時代の生きている文脈の数だけ広がるルターとの対話的な学びがある。その研究は、学際的で、さまざまな知見を呼び寄せ、対話するコンストラクティブ（建設的）なものになるだろう。

ルター研究所には、このように二つの系統的な研究課題があるのではなからうか。原典研究にして歴史神学としてのルターと、「いまここ」にあるルター。この二つは別々であり、また深くつながっている。「歴史的なルター研究」と「今日的なルター研究」である。いずれにせよ、原典研究と歴史へのまなざしが欠落した研究は、表層的な評論におちいる危険があり、逆に「いまここ」という文脈に頓着しない研究もまた多くの人にかかわりのない象牙の塔の学問になり果てる危うさもある。あらためて思う。このバ

ランス感覚、この弁証的な研究の姿勢こそが、研究所開設時からあった理念であり、目標だったのでないかと。

(所員 ルーテル学院・神学校教員)



A. Tnaini 画 “The Life of Martin Luther”

書評 (本の紹介)

『アジアの視点で読むルターの小教理問答』

(リットン、二〇一三年)

森田 哲史

本書は、アジアルーテル国際会議が宗教改革五〇〇年を機に制作を決定し、二〇一九年に刊行された『Luther's Small Catechism: An Exposition of the Christian Faith in Asian Contexts and Cultures』を、執筆者の一人である宮本新牧師が全訳してくださったものです。

小教理問答と言えば、『エンキリディオン(必携)』と呼ばれたほど、ルーテル教会にとってはなじみの深い書物です。しかし、子どもの問いかけに親が答えるという形式である小教理問答は、その簡潔さのあまり、五〇〇年の時を超えて、どのように考えればよいか迷うことも少なくありません。

本書は、そんな小教理問答を、インド、香港、タイ、インドネシア、日本にルーツを持つ六人のルター派神学者が、宗教的多元論、貧困、社会的不平等、植民地支配、生態系の危機、家父長制、自死の問題など、アジアの伝統や現代的課題を踏まえ、解釈してくださっています。本書の構成は、小教理問答の項目ご

とに「本文」、「現代における一般的な解釈」、「アジアの視点」という順番で書かれています。また、各項目の終わりに「学びのために」と題された問いかけがあり、私たちがただ受け身で聞くだけでなく、私たちの現実の中でどのように適用できるか議論を促しています。それぞれの教会や集まりにおいて、本書を用いた学びと議論を深めることが出来るのではないかと思います。

欧米とアジアの宗教観を比較するとき、最も引き合いに出されるのは、一神教と多神教による価値観の違いではないでしょうか。本書の十戒の章での「第一戒とアジアの視点」では、第一戒(あなた以外の神々をもつてはならない)が、他宗教やその伝統を断罪するものであるかどうかを再考しています。

ルター自身は、一六世紀のドイツ人であるゆえ、宗教多元状況を積極的に取り上げてはいませんが、ルターの強調点は、私たちの信頼と心のよりどころが神に置かれているかどうかでした。その上で本書は、第一コリント八章四一六節を引用し、唯一の神が存在するにもかかわ

らず、神に対するさまざまな認識、イメージ、シンボル、属性、表現が存在することまでが否定されるわけではないと言います。そして、キリスト者が、他宗教の人々が表現する神認識の違いを拒否し反論するのではなく、異なる方法で神の唯一性をどのように共有し告白できるのか、その可能性を探し求める方がよいと言います。さらに、ルターは「他の神々」という表現には、マモン(不正な富)、権力や支配、教会の誤った伝統や慣習なども含んでいると言います。私たちが本当に対抗しなければならぬのは、他宗教の神々ではなく、神を忘れた世俗主義や行き過ぎた資本主義などによつて、神や聖なるものへの信仰や畏敬の念が失われていくことなのです。

日本福音ルーテル教会は、二〇一八年第二八回定期総会において、アジア

宣教を行うことを決議しました。その中でも、アジアで最も若いルーテル教会であるカンボジア・ルーテル教会へ、ELCA(アメリカ福音ルーテル教会)と協力して宣教を行うことが計画されています。今の日本の教会にそんなことが出来るのでしょうか。しかし、他宗教に囲まれながら歩んできた日本の教会だからこそ、同じアジアのキリスト者と共に歩んでいける部分があるのではないかと思います。

日本においても、アジアにおいても、他者を理解し尊重した上で、私たちは言葉や葉を宣べ伝えていく必要がありますが、本書はその助けになるのではないかと思います。本書を執筆し、翻訳してくださった宮本新牧師に感謝いたします。

(JELC 大江教会牧師)



追悼

鈴木浩先生のルター研究

所長 江口 再起

鈴木浩先生が、天に召された
(一九四五年八月七日―二〇二三年六月
一日 七七歳)。

異能の人であった。別の言葉で言えば、マニアックな感じをたたえた学者であった。急いで言えば、これは誉め言葉である。なぜなら、一つのことについて「ふう」であつては研究者にはなれない。学者は多かれ少なかれ、みなマニアック。研究においても、人柄においても。お酒とソバと、そして魚の飼育に心を傾けていた。

まず略歴を記しておこう。一九八一年神学校を卒業後、日本福音ルーテル教会の牧師として、大岡山教会、諏訪・岡谷教会、名古屋教会で牧会にあたられた。よき牧会者、人に愛されるお人柄であつた。その間一九八九年から一九九三年まで、米国のルーサー神学校留学(神学博士)を経て、一九九八年よりルーテル学院大学・神学校で神学教員。ルター研究所の第二代所長。またルーテル・カトリック国際神学対話委員等々を務める。二〇一六年、引退牧師となる。

さて、先生のお仕事である。まず何と言つても、翻訳の仕事である。アメリカの驚くべき教会史家 J・ペリカンの、驚くべき著作『キリスト教の伝統…教理発展の歴史』全五巻の、驚くべき翻訳(A五判で、約二六〇〇頁!)である。間違ひなく、わが国の神学書の翻訳部門の金字塔の一つである。その他にも、マクグラス『ルターの十字架の神学』、ゴンザレス『キリスト教神学基本用語集』、メイエンドルフ『ビザンティン神学』の翻訳などなど。流暢な翻訳である。ともかく抜群の語学力であつた。私も、よく難解なラテン語の文章について先生に教えていただいた。

先生のお仕事のもう一つの柱は、もちろんルターを軸とした神学の研究である。どういう研究か。ルター義認論の前提としての(アウグスティヌス)原罪論への注目・強調である。現代において「原罪」に言及する神学はあまりない。しかし鈴木氏は、それを断固として強調した(ルーサー神学校提出の博士論文は“The Doctrine of original sin”である)。

その他、「アウグスブルク信仰告白」一六条の「正しい戦争」をめぐる問題、宗教改革期におけるメランヒトンとギリシア正教会との関係、ルターの「九十五条」の前年の文書「九七カ条」の問題など。

先生は文章がうまかつた。たぐみな文章の運びとレトリック。たとえば、ルターの仕事全体を「一点突破・全面展開」と表現した。ルターが神の義の再発見という一点を突破したことによって、当時の教会のあり方を改革展開したことを表現したのである。徳善義和先生(岩波新書『マルティン・ルター』)は、ルターの仕事を「一点突破・全面展開」と形容したが(四〇頁)、これは弟子である鈴木先生の言い方を借用したのである。そして更に言えば、鈴木先生も若き日に影響を受けた六〇年代後半の新左翼学生運動の闘争スローガンの言葉「一点突破・全面展開」を神学的に借用したのである。ともあれ、あざやかな表現の人であつた。

最後に、私の個人的思い出を記しておこう。私が藤が丘教会の牧師であつた時、先生はお隣の大岡山教会の牧師であつた。二人とも三〇代半ば。当時、ルーテル教会の機関紙「るうてる」の責任者は事務局長の北尾一郎先生であつたが、鈴木先生と私が編集委員として、毎月市ヶ谷の事務局に行き、紙面作りをした。いささか学級新聞のようであつた内

容を、今日のように少しスマートにしたのである。もう一つ、当時、やはり都内にいた同世代の四人、故三浦謙、江藤直純、鈴木浩、そして私の四人で、自主的な勉強会をつくり、教会のこと、神学のことを話した思い出である。自由になにでも話したこと、これは若さの特権かもしれない。やがて四人はそれぞれ忙しくなり、それぞれの仕事をやりはじめ、神学や教会のあり方をめぐって時には鋭く意見の対立もはらみつつも、やはり同世代の者としての信頼を持ち続けたと思う。この四人の中で、鈴木先生がやはり一番、みなに愛された人だったと思う。

《ご案内》ルター研究所 クリスマス講演会 “ルターとクリスマス”

12月10日(日)の午後、全国オンラインで第3回クリスマス講演会を開きます。ぜひ、ご参加ください(詳しくは、各教会に連絡します)。

= プログラム内容 =

- ◆シンポジウム「ルターとクリスマス」
(立山忠浩、宮本新、高村敏浩)
- ◆お話「楽しいルター家のクリスマス」(高井保雄)
- ◆オルガン演奏(J.S. バッハ他)(演奏・湯口依子)

再録

説教する人ルター

鈴木 浩

「宗教改革者」ルターは、事柄に即していえば、まずもって「礼拝改革者」であった。しかし礼拝はどう変わったのか。それまでの教え（実体変化の教理）によれば、礼拝の中心であった聖体拝領（聖餐式）では、パンは、イエス・キリストの「体」に変わったのである（聖変化）。パンはもはやパンではなく、文字どおり、マリアから生まれた「あの体」になった、というのである。「説教」は言ってみればその付け足しであった。

無論、教会の伝統の中で、説教が軽視されていたわけではない。教会の歴史の中では、繰り返し、「神の言葉」を聞くことの重要性が説かれてきた。しかし、「実体変化」の教理が教会の公式の教えとなってしまうと、その教えの圧力が圧倒的に大きくなり、その分、説教の比重はずっと小さくなった。「イエス・キリストの体そのものを受ける」ことと、「イエス・キリストについて語る」こととは、体そのものを受けることの方が、はるかに尊いことのように思われたからである。極端な場合には、かつて預言者が警告したように、「神の言葉を聞くことの飢饉」が起こってしまう危険があった。

しかし、ルターは「神の言葉の力」を何よりも強調したいと思った。神の言葉が、「今・ここで・あなたに向かつて」語りかけているのだ、それも、「なきものがあるがごとくに」引き起こす「福音」（喜ばしいニュース）を力に満ちて告げ知らせているのだ。だから、説教は、礼拝の中で、とりわけ大切なのだ。



Deus dixit（デウス・ディクシット、神が語りたまうた）が二〇世紀の説教を変えた、と言われた。Nunc Deus dixit（ヌンク・デウス・ディキット、神が今語っておられる）が、いまルターにならう説教者の課題だ。

*「ルター新聞」七六号（二〇二一年五月）より再録しました。鈴木先生の恐らく最後の神学的原稿と思われる、すばらしい文章です（え）

鈴木浩牧師との

思い出の中から

高井 保雄

「お前は軽薄だ。」というのが神学校時代の氏の私に対する決まり文句だった。

当時の氏は長髪で額はかなり高く、常に細身のスーツを着て、話す時は眼鏡の奥から鋭い眼光を放つ、どこか高踏的で近寄りたがたい雰囲気の人だった。

これではいかんと思いい、私はある夕食時、「鈴木さん、ポタージュの日本語訳知ってる？」と話しかけた。

すると、しばらくの沈黙の後、不機嫌な声で「何だ？」と言って、

味噌汁の椀をすすり始めた。私は徐に「ポッター汁。」と答えた。……何の反応も無い。どうしたかと彼を見ると、飲み干そうとしていた味噌汁の椀がピタッと止まり小刻みに震えている。どうやら味噌汁を飲みながら笑っていたのだ。よく見ると、口を覆った椀の左右からこぼれた味噌汁が顎を伝って、スーツの襟にじじくがポタポタ垂れていた。……

そんな次第で、いつ頃からか氏とは遠慮のない仲になり、しばしば熱く議論し

た。氏は神学校に来る前にラテン語を独習しトマス・アキナスの『神学大全』を読んだ。その巻末で、トマスは自分が今啓示されたことに比べると、これまでの全著述は藁くずに過ぎないとして未完のまま擱筆した、という話をうつとりと話してくれた。私も神学校に来る前は存在論的関心から、ある論理的構想について哲学者の鶴見俊輔に手紙を書いたら激賞された話を話すと、「ツルシユンにか。」と妙に感心していた。

ある時、氏に「Intellego（知る）には曲げるという意味がある筈だ。」と言うと、「曲げる？……そんな筈は……。」と呟きながらラテン語の歴史的意味辞典で語歴を辿ると、「アッ！」と声を上げたので、「有った？」と聞くと、黙って激しく頷いた。

その翌日、氏は黒いスーツで授業に出ていた。「誰か亡くなったの？」と聞くと、「葬式だ、葬式だ。」と言うだけだった。

氏は、この時自己の内において何かの葬りをしたのではないだろうか。

氏の神学的足跡を見ると、それまでトマスやバルトを読んでいた、その神学的関心の中心は教義学だと思われたのだが、いつしか歴史的事象の根元に向かう歴史神学へと舵を切った事が分かる。

私は、氏の「教義学から歴史神学への転回」は、この「葬式」がきっかけだったのではないかと考えている。

（所員 JELC 引退牧師）

シリーズ
「人間ルター」19怒りの人
ルター

立山 忠浩



中川浩之・画

マルティン・ルターは感情の起伏の激しい人だったようだ。他の宗教改革者たちと比較されることがある。同僚のフィリップ・メランヒトンやルターと並ぶ改革派のジャン・カルヴァンは穏やかな性格であったと言われる。それは文書にも表れていた。カルヴァンは均等な聖書註解を行い、神学的著作も実に網羅的で、驚くほど冷静でバランスが取れている。ルターは逆に一点に集中する。説教する福音書の箇所には偏りがあり、聖書講解はパウロ書簡が突出している。つい気持が入るタイプなのだろう。

感情の起伏は怒りの感情において特に表われた。怒るルターである。こう言うと、ルターの性質を否定的に突いているように感じるかもしれないが、そうではない。宗教改革の発端となった「九十五箇条の提題」は、カトリック教会の不正に対する怒りの表現であったからだ。以降繰り返された諸討論でも、聖書の福音が正當に解釈されず、聖書以上に伝統や教皇、あるいは公会議が上位に置かれることへの怒りが表出する。宗教改革はルターの

怒りなしには前進しなかったのである。

怒りはユダヤ人にも向かった。ユダヤ人を題材とした執筆には過激な言葉が散見される。この時代の文章の激烈さはルターに限ることではないが、検証すべき課題である。キリストの福音を丁寧に説き、キリスト教への回心を忍耐強く待ったにも関わらず実現しなかった。ゆえに怒りの沸点に達したかのように非難し断罪したのである。

この怒りを我々は肯定的に評価しない。ただ、怒りの理由がどこにあったのかを問わなければならないように思える。ルターの激しい性質に原因を狭めてはいけい。ユダヤ人の旧約聖書の信仰を認めることができず、「イエス・キリストへの信仰」の有無だけがルターにとっての関心事だったのである。それ以外の信仰を容赦なく断罪した。

では今日の脈略と地平で聖書を読み、神学するとどうなるのか。ルターの怒りは今日を生きる我々に新たな問いを投げかけているように思える。

(所員 JELC 都南教会牧師)

ルターの
ことば

JELC 藤が丘教会 牧師 佐藤 和宏

「わたしもまたわたしの隣人のために一人のキリストとなろう。」

『キリスト者の自由 第27』(1520)

藤が丘教会は40年前、地区と教区の諸教会の祈りと支えによって建てられました。宣教40年の今年、皆さんにその感謝を示すために、地域の方々に仕えることにしました。そのために地域の人は何を必要としているかと話し合い、高齢者には居場所、子どもたちには学習支援を提供することにしました。子ども支援については、子どもの安全など諸問題が浮上し、凍結することになりましたが、高齢者に対しては、5月より月に一度のプログラムを提供し、毎回30名ほどの方々が集まるほどになっています。

ある日、小学校から送られてきた印刷物に「地域コーディネーター」の言葉を見つけ、養成講座の参加者を募集していることを知りました。15年ほど前にアメリカへ研修に行きましたが、それはある出版社がウェブサイトなどを通じて発信している、青少年へのプログラムや考え方に興味を持ち、学びたいと思ったからでした。アメリカ滞在中、その出版社が「青少年育成に役立つ40の要素」という調

査結果をまとめ、報告しているのを見つけました。文部省(当時)の担当部署が日本語にも訳していました。その40の要素のうち、もちろん本人の努力も求められていますが、大半は家庭、学校、そして地域社会と、周囲の大人たちの協力すべきことがあげられていました。「地域ぐるみで青少年を育てる」、個人の資質や家庭環境を越えたプログラムを何とか実現したいと思いました。帰国後派遣された教会の属する自治体の担当部署に何度も赴き、話を持ちかけましたが、自治体が主導するのは難しいと断られたのを思い起こします。それから10数年を経た今年、横浜市が「地域コーディネーター」を推進していることを知ったのです。まさにあの報告書が言っていることを推進する内容でした。現在、養成講座を通して、学校と地域をつなぐ働きへの道がより鮮明になってきました。地域にある隣人のために、仕える教会の一員として、用いられていきたいと願います。ルターの言葉が、私の背中を押してくれたと思います。

わたしの博士論文

高村 敏浩

『福音を説教すること』についての説教：先行する世代、同世代、次世代の聖書解釈者たちとの関係の中で捉えるマルティン・ルターのペトロの手紙一の説教』

(原題: Preaching on Preaching the Gospel: Martin Luther's Sermons on the First Epistle of Saint Peter (1522-23) in Relation to Its Preceding, Contemporary, and Subsequent Generations of Exegetes)

私は二〇一三年八月、フィラデルフィアにあるルーテル神学校の博士課程で学びはじめました。二〇一八年七月に帰国してからは、牧師の働きをしながら研究を続け、今年二〇二三年二月に論文の提出と審査を経て、五月に学位の授与を受けました。今回、こうして研究について紹介する機会を与えられたことをうれしく思います。

ルターは、一五二二年から二年弱の間、ヴァルトブルク城に置かれて過ごしました。この滞在中、ルターは新約聖書をドイツ語に訳します。一五二二年、ルターは自分が不在のために起こった騒乱に揺れるヴィッテンベルクに戻ると、ペトロの手紙一から連続説教を行いました。彼はこの書を網羅するかたちで、いわゆる「講解説教」を行うのですが、これらの説教はすぐにまとめられ、編集を経て

聖書注解として出版され、改革運動の初期に編纂されたヴィッテンベルク聖書注解シリーズの一つとなります。研究に用いたのは、この注解書です。しかし、今触れたような背景を持つため、この注解書は、中世後期から宗教改革初期の、まさにこの時代、変化しつつあった説教の特徴をも反映しています。研究の前半では、これら説教と彼の受けた修辞学、中世後期に興った人文主義(聖書人文主義)、歴史的出来事や状況など、ルターのペトロの手紙一の解釈と説教に影響を与えた諸要因といった背景を見ました。

これらを踏まえて、論文の後半は、実際にルターがどのように聖書を解釈し、また説教したのかということ、いくつか選択した本文(テキスト)を詳しく見て検証しました。ルターの解釈については、彼がペトロの手紙一から説教するにあたって参照したであろうリラのニコラウスなどの注釈付きの標準聖書注解書(Glossa Ordinaria)とロッテルダムのエラスムスのギリシャ語聖書や注解と比較しながら、何がルターに独自の解釈なのかを見ました。また、主に一五六〇年代に、第二世代のルター派説教者や神学者の説教集や注解書とも比較し、ルターが次の世代にどのように受容されたのかということも、検証しました。

ルターのペトロの手紙一の解釈と説教が私たちに証しすることはいくつありますが、特に重要なものとしては次のこ

ととなるでしょう。それは、ルターが聖書解釈の歴史と伝統に属し先人たちや次世代の聖書解釈者たちと対話していたこと、そして、それらが必ずしも先人には理解されず、また引き継がれなかったとしても、ルターがこの書の中心のメッセージを、福音とその伝達の第一の器として「生きた声」で語る説教であると捉えていたということです。これは、現代を生きる私たちにもあてはまります。

(所員 JELC三鷹教会牧師)

ルターと会衆讃美

アンドリュー・ウィルソン

ルターはこう語っている。「音楽は神の賜物であり、人間が与えたものではない。音楽は悪魔を追い払い、人を元気づける。怒り、不品行、高慢、その他の悪徳をすべて忘れさせる。私は音楽を神学に並べて、もっとも高く評価する。」

ルター派会衆讃美の豊かな伝統について、マルティン・ルター以上に貢献した人はいない。彼はしばしば友人や学生と歌い演奏した、熟練した音楽家であり、知識豊富な批評家でもあった。音楽は、繰り返される憂鬱な気分から彼を救ってくれたのである。

ルターは子供たちはもちろん、将来牧師になる神学生たちのために、音楽教育

は不可欠なものだと考えていた。改革者として、音楽を芸術の最高峰とし、また説教の一形態として繰り返し賞賛したのである。「預言者たちは音楽以外の芸術を用いなかった。神学を述べるとき、幾何学や算術や天文学としてではなく、音楽として行い、神学と音楽を最も緊密に結びつけ、詩篇と歌によって真理を宣べ伝えている」(LW四九:四二八・WA Br・五:六三九)。

ルターがヴィッテンベルクで行った改革には、教え、啓発し、そして悪魔を追い払うために、たくさんの方が含まれていた。ルターはパロディの先駆者であり、既存の楽曲を福音的な内容に適合させもした。音楽もまた、福音を「語る」ものののだ。ドイツ語のミサ曲では、福音主義的な神学を反映するために、従来の式文の曲調を変え、キリストが述べた「これは私の体であり、血である」という聖餐式の「設定辞」を福音と同じ調子にし、聖餐を犠牲的な性格ではなく、福音的な性格を強調するようにしたのである。

更に讃美歌はルターにとって、天国を予感させるものであった。ルターと同僚ヴァルターが主張したように「天国では、文法、論理、幾何学、天文学、医学、法学、哲学、修辞学は必要ない。美しい音楽だけが必要である。そこでは、主の歌い手たちは皆、この芸術だけを用いるだろう。」

(研究員 ELC A 宣教師、

ルーテル学院教員)

牧師のためのルター・セミナー(二〇二三年度)

多田 報告
哲

今年も「牧師のためのルター・セミナー」が、五月二十九日(月)～三〇日(火)の日程でオンライン形式(Zoom)にて開催されました。コロナ禍がきっかけに始まったオンライン形式での開催ですが、気軽に参加できるというオンラインのメリットを活かし、対面で集まっていた頃よりも多くの方々が参加してくださいました。

テーマは「宗教の神学、その後」と題して、プログラムは三つの発題と全体討論が行われました。最初の発題はルター研究所所長の江口再起先生による「今、宗教(の神学)を問う」でした。キリスト教に限らず、日本の歴史や文化に深く関わってきた仏教さえも低迷の時代を迎える中で、現代社会における宗教とは何か、スピリチュアリズムや世俗化といった観点からルター神学を再考する試みについてお話してくださいました。

二つ目の発題は、私(多田)が今年一月に出た『徹底討論!問われる宗教とカルト』(NHK出版)についてブックレポートをいたしました。この本は、二〇二二年七月に発生した安倍晋三氏銃撃事件を受けてNHKの「この時代」宗教・人生」という番組において行われた討論会の内容を書籍化したものです。

カルトの定義、宗教とカルトとの境界、現代社会と宗教の問題、政治と宗教の問題、宗教の公共性など論点は多岐に渡り、内容を整理して理解するだけでも一苦勞ですが、討論を行なった専門家六人のうち三人がキリスト者であったことは、日本社会においてマイノリティであるキリスト教が、その日本社会に果たせる役割を期待されているとも言えると思います。

発題の三つ目は、宮本新先生が『アジアの視点で読むルターの小教理問答』をめぐって「お話しくださいました。ルターの小教理問答を現代のアジアの文脈でどのように受けとめ、活かしていくか、自らも執筆に関わり、邦訳もなされた宮本先生ご自身による解説をお聴きすることができ、貴重な時間となりました。行き詰まりを感じる日本のキリスト教会にとつて刺激となる著作です。

そして最後に全体討論が行われました。昨今話題の宗教二世の問題と信仰継承についてや、政治と宗教、社会と宗教の関わりについて誰もが現場で悩みを抱えていることが共有されたと思います。一人ではなく同じ問題に同労者が共に取り組むことができれば心強いことだと改めて思われました。そのために、プログラムの時間外にも忌憚なく意見交換や立ち話ができる対面開催のメリットにも思いを馳せることになりました。今後は様々な形式で開催されることを期待しています。(研究員 JELC 合志・水俣教会牧師)

研究所ニュース

●鈴木浩先生召天

第二代所長の鈴木先生が六月一日に亡くなられました。葬儀は一九日、三鷹教会で行われました。四〇五面をご覧ください。

●徳善義和先生追悼記念会

一月に亡くなられた徳善先生の記念会が六月十七日、東京教会で開かれました(ルーテル学院・ルター研究所、市ヶ谷教会、東京教会共同主催)。第一部は礼拝(説教・石居基夫)、第二部は記念会(略歴と業績紹介・江口再起/追悼の言葉・吉高叶NCC議長、光延一郎ルーテルカトリック共同委員、西原廉太聖公会代表、湯川郁子市ヶ谷教会信徒/徳善家挨拶)、第三部はバツハ・オルガン演奏(演奏・湯口依子)。参加者約百名、オンライン配信約三百名でした。

●牧師のためのルター・セミナー

五月二十九(三)〇日、オンライン形式で開かれました。テーマは「宗教の神学、その後」。約四〇名参加。上段をご覧ください。

●公開講座

二〇二三年度後期は、「ルターの神学」(担当・江口)です。受講対象者は神学校・学院生。

●クリスマス講演会

二月一〇日(日)午後、第3回「クリスマス講演会」がオンラインで開催されます。四面をご覧ください。

●献金の感謝とお願い

ルター研究所への、皆様のご支援と献金、心から感謝します。

ルター研究所は、日本福音ルーテル教会からの支援金(一〇〇万円)と皆様のご支援(約一五〇万円)で成り立っています。二〇二三年度のルター研究所への指定献金は、一四六万八八〇〇円でした。同封されている後援会献金の振込用紙にある「後援会献金(ルター研究所)」という欄にご記入いただければ、そのまま「賛助会費」として計上されます。皆さまのご理解とご支援をよろしくお願い致します。

(所長 江口再起)

ルーテル学院・ルター研究所

三鷹市大沢三ー一〇一二〇

電話 〇四二一三ー一四六一

発行責任: 江口 再起(所長)

e-mail: luther-studies@luther.ac.jp